

目次

はじめに

第1章 社会福祉施設が担う地域での役割

～地域社会に閉ざされた施設から開かれた施設へ～

第2章 調査方法

第3章 調査結果

第1節 建設時における福祉施設と地域住民の歩み寄り

- (1) A 高齢者施設にみる福祉施設への地域住民の受容過程
- (2) C 知的障害者施設にみる福祉施設への地域住民の受容過程
- (3) 2つの施設の建設過程から見えてきた建設に関わる施設間の相違点や共通点

第2節 建設後運営時における福祉施設の地域への取り組み

- (1) A 高齢者施設の苦情への対応と地域への取り組み
- (2) C 知的障害者施設の苦情への対応と地域への取り組み
- (3) D 保育園の苦情への対応と地域への取り組み
- (4) E 保育園の地域への取り組み
- (5) 各施設から見えてきた運営時の福祉施設の地域に対する姿勢

第4章 福祉施設は地域の中(まちなか)にあるべきなのか?

第5章 まとめ

おわりに

参考文献

## はじめに

私がこのテーマ設定に至ったきっかけは、私の弟の存在である。私の弟は、ダウン症候群という障害を持っている。弟は、中学校、高校と特別支援学校で学校生活を送った。私は、弟の運動会や生活発表会、卒業式といった行事参観のために特別支援学校を訪れる機会が何度かあった。その時に、「なぜ、弟の通う特別支援学校は、こんなに辺鄙な場所にあるのだろうか<sup>1</sup>。」という疑問を抱いた。その疑問から、特別支援学校に限らず、福祉施設は地域から少し離れた辺鄙な場所にあることが多いのではないかと感じるようになった。この疑問を抱き始めてから、弟が地域から孤立しているような寂しい気持ちになった。どんな人も差別や排除をしないようにしよう、共存しようということが言われているが、弟が通う特別支援学校が辺鄙な場所にあるということは、立場の違う人、社会的弱者と言われる人をその地域から排除しているのではないかと感じたからだ。地域から排除されているということは、地域から孤立している、地域住民との関わり合いが私たちよりも少なくなっているのではないかと感じた。障害のある弟をもつ姉の立場からすると、弟が地域の中で孤立することなく、地域住民の1人として地域に受け入れられ、地域で普通に過ごせる環境があってほしいと願う。もし、福祉施設が地域の中にあれば、利用者ももっと地域との関わり合いが増えて、私たちと変わらず、地域の中で普通に暮らしていけるのではないかと考えた。

このように考え始めているときに、山本おさむ『どんぐりの家』(小学館、1993)を読んだ。この漫画の中で、障害をもつ家族、特に両親は、私たちが死んでもこの子たちが生きていけるようにとこの子たちにも働く場、居場所を作りたいという思いから、福祉施設建設に励むというシーンがある。しかし、福祉施設建設の現実は甘くなく、建設費用も充分になく、「障害者施設が近くにできるなんて…」と地域住民が福祉施設建設に対して敬遠したり、土地や家を貸してもらおうことができなかつたりと福祉施設建設に至るまでにはたくさんの壁があるということが描かれていた。さらに、高齢分野において活躍され、現在地域密着型総合ケアセンターきたおおじ代表の山田尋志先生<sup>2</sup>から福祉施設建設に関する

---

<sup>1</sup> 弟の通っていた特別支援学校は、最寄り駅から徒歩37分、車で10分の位置にある。山を登っていくと学校があって、周辺にはあまり家もなく、ひっそりと佇んでいる印象を受ける。

<sup>2</sup> 山田先生は、立命館大学産業社会学部非常勤講師として、社会福祉士課程における社会福祉士現場実習を担当されている。また、高齢者施設の建設や運営をされ、現在は、地域密着型総合ケアセンターきたおおじの代表を務めておられる。きたおおじは、これまで個々で運営していた社会福祉法人をグループ化し、法人間で連携し運営していくという新たな試みをされている。それが、日本初の試みである7法人が集結した「リガーレ～暮らしの架け橋～」である。経営機能の強化、人材育成とキャリアパスの充実、ケアの質の向上といったグループ化のメリットによって、7法人が地域展開をはかることを目指すというものだ。法人間で連携することにより、お互いの強みを共有し、地域密着型のケアを進め、地域展開を図っていくことができる。さらに、7法人が連携して人材育成を行うことで職員の介護という仕事にやりがい、夢を持ってもらい、それがケアの質にもつながることになる。この試みが結果として、住み慣れた地域で最後まで住み続けたいという利用者の声に応えることができる仕組みを作っている。そして、地域包括ケアを推進し、住民が集える場を提供し、住み慣れた地域で馴染みの人間関係と切れ目のないサービスを提供するという役割を担うのである。

るお話をうかがった。その時に、山田先生は、「福祉施設建設の際には、地域住民からの賛成をもらうことが難しい。それでも、地域住民と何度も何度も話をして、どうすれば福祉施設が受け入れてもらうことができるのか諦めず考え続けることで、建設に至る。」と  
言っておられた。

山本おさむ『どんぐりの家』（小学館、1993）、山田先生からのお話を通して、福祉施設を建設すること、ましてや地域の中に建設することは、大変な苦労があり、簡単なことではないということを知った。そこで、「なぜ福祉施設は地域に受け入れてもらうことが難しいのか。」という疑問を抱いた。そして、地域住民が福祉施設を受け入れるまでのプロセスや福祉施設と地域住民との関係性について興味を持ったのでこのテーマ設定に至った。

## 第1章 社会福祉施設が担う地域での役割

### ～地域社会に閉ざされた施設から開かれた施設へ～

私が弟の通っていた特別支援学校に訪れた時に「なぜこんなに辺鄙な場所にあるのだろうか？地域から孤立しているのではないか？」と疑問を抱いた。特別支援学校や社会福祉施設は、いつからこんな風に地域から離れた辺鄙な場所に建設されてきたのか。昔から、むしろ昔の方がこういった施設や利用者を地域から排除しようとする風潮があったように思う。それを表わしているものの例として、ハンセン病患者を地域から離れた施設に隔離し収容してきた過去があげられる。社会福祉施設は、歴史的に見ても地域から離れた人目につかないような辺鄙な場所にあり、地域からは排除されていたのである。そして、施設を利用する社会的弱者と言われる人々が隔離されてきたようである。このことについて、人間社会において人々のつながりと相互扶助は、人が人間らしく生きるために保障される最低限度の糧だと考え、地域福祉推進における「公共空間」形成についての調査研究を進める金は、以下のように述べている。

社会福祉施設は、入所保護により援助が必要とする人に福祉サービスを提供するという機能を有している反面、入所者個人の人権とプライバシー侵害や多様性に欠き画一的な生活を上から強いられてきた。またハンセン病等の伝染病を持つ人や、障害者、老人といった社会的弱者を施設内に収容隔離するということで本来地域社会がかかえている課題を封印するという役割も有してきたといえる。（金蘭姫 2007：61）

社会福祉施設は、1965年後半からの地域社会への役割が強調されるようになり、施設の社会化の過程に入るまでの間、地域社会から隔離され、地域社会との関係を持っていなか

ったと考えられる。このことについては、“1973年、秋に起きた第一次石油危機までの後、政府が「地域重視」を打ち出すまで、入所施設の量的拡大と一貫した「隔離収容」が行われた。”と井上・岡田（2007）がその論考「知的障害者入所更生施設の歴史的課題の検討」の中でも述べている。障害者や、高齢者、病気を抱える人々は、施設という密閉された空間の中で、地域住民と交流することもできないそんな生活をしていたのかもしれない。社会福祉施設は、社会的弱者を保護し、支援するものとしているが、社会的弱者を地域社会から排除することが目的だったのではないかと感じる。社会福祉施設や社会福祉は、社会的弱者を守るためのものではなく、健常者を守るためのもの、**out of the community**（排除のシンボル）であったと山田先生もおっしゃっていた。こんな過去があったと知り、もし、私の弟がそんな時代に生きていたら、差別され、排除の対象となっていたと考えると悲しくて胸が苦しくなった。

しかし、地域社会という視点が欠け、閉鎖的で隔離的であった社会福祉施設は、時代と共に、地域社会という視点を持った開かれた施設へと移行しようとする流れが生まれる。このことについて、金は以下のように記している。

社会経済的分野をはじめ、福祉行政は地域社会の志向重視という情勢とあいまって、福祉施設の実践主体者らは社会福祉実践の場において地域福祉推進を試みるようになり、福祉施設を社会（地域社会）に開放していくのである。つまり福祉施設がもっている専門的なケアサービスを地域住民への提供やボランティアの受け入れなどにより、施設の中に地域住民を迎え入れ、利用者（入所者）と運営・管理者しか存在していなかった施設の中に地域住民が加わることになる。また、施設の中で完結された利用者（入所者）の生活範囲は、地域社会まで拡大していくようになる。（金 蘭姫 2007：64）

以上の引用部分からも分かるように、社会福祉施設は、地域社会に開いてこう、地域住民との交流を図っていこうとする変化がみられる。障害者や高齢者、病気を持つ人々など社会的弱者を排除せず、彼らも健常者と同じで地域社会で過ごすことを当たり前だと考えるようなインクルーシブな社会に変わってきているのだと考えられる。

さらに、障害者分野においては、ノーマライゼーション思想の普及とともに、“隔離性、閉鎖性を批判されていた更生施設は、知的障害者の生活圏を広げる取り組みや「施設設備・職能の社会化」等の施設のオープン化による「施設の社会化」で地域の福祉を担う資源としての役割を目指した。地域住民の更生施設の施設機能の利用、施設の運動会や盆踊り大会への行事の参加は、地域交流や利用者の生活圏の拡大等で成果が見られた”と井上・岡田（2007）は指摘する（前掲 p10）。施設が社会化されることによって、利用者が地域に生

活圏を広げていくだけでなく、逆に地域住民が福祉施設に生活圏を広げていくことにもつながっている。利用者のためだけの福祉施設ではなく、利用者を含め地域全体（地域住民）のための福祉施設に変化しているように感じる。この変化は、私にとっては、理想的な変化であり、誰も排除されることなく福祉施設も地域に溶け込む社会に近づいてきていると思わせるものであった。

実際に、社会福祉施設は、地域に開かれ、地域と関わる施設になっているのだろうか。施設完結の生活を送っていた利用者（入所者）は、地域社会にまで生活圏を広げることができているのだろうか。地域住民は、これまで排除されてきた福祉施設や社会的弱者を受け入れることができているのだろうか。福祉施設が利用者だけのものではなく、地域住民のための福祉施設になっているのだろうか。これらの実態を確かめるべく、社会福祉施設運営者にヒアリングをすることにした。ヒアリングを通して、社会福祉施設が社会化されているのか、地域社会でどのような在り方をしているのか、地域住民との関係はどうか、検証を進める。その中で、社会福祉施設が地域に開けた施設にするために、どのような取り組みを行っているのかについても検証を進める。

## 第2章 調査方法

第1章で述べた検証を進めるために、ヒアリング調査を行った。今回の調査で、ヒアリング調査を選択した理由は、アンケート調査ではたくさんの施設に協力をお願いすることができるが、表面的な結果しか得られないと考えたからだ。ヒアリング調査では、直接施設長さんとお会いすることで、結果だけでなく、結果に至るまでの施設長さん自身の気持ちなど内面的なことも聞くことができると推測した。また、実際に施設へ足を運ぶことによって、施設周辺の環境や、施設の雰囲気を感じることもヒアリング調査の利点であると考えた。

ヒアリング調査では、実際に社会福祉施設を運営されている施設長さんにお話を伺った。調査対象は、高齢者施設 2 軒、障害者施設 1 軒、保育園 2 軒とした<sup>3</sup>。私は、もともと障害者施設にだけヒアリングに行こうと考えていた。しかし、高齢者施設や障害者施設に設計者として関わってこられた蔵田力先生にヒアリング調査について相談したところ、「1つの分野だけに絞るのではなく、いくつかの分野に話を聞きに行ったほうがよいのではないか？」という助言をいただいた。具体的には、1つの分野だけではなく、高齢者分野、知的障害者分野、児童分野に話を聞きに行くことで、それぞれの抱えている困難や課題が発見できるのではないかという意味での蔵田力先生からの助言であった。その言葉を受け、私は、高齢者分野、知的障害者分野、児童分野の3分野の施設にヒアリングに行くことに決

---

<sup>3</sup> 立命館大学産業社会学部非常勤講師として「福祉住環境論」を教えておられ、長年に渡って病院施設や高齢者施設、障害者施設、そして保育所等の医療福祉関連施設の設計に関わってこられた蔵田力先生（地域にねぐさ設計舎 TAPROOT 代表）からご紹介いただいた。

めた。

以下、改めて、なぜ、この 3 分野の施設に着目するのか、その理由を以下記していく。

・高齢者分野

現在の日本は、少子高齢化社会であり、高齢化率は 26.7%（平成 28 年版高齢社会白書 - 内閣府）と人口に占める高齢者の割合が大きくなっている。高齢者が増えていくということは、高齢者施設が今まで以上に求められるようになると考えられる。だからこそ、高齢者施設がどのように建設され、運営されているのか聞いておくべきなのではないかと考えた。

・知的障害者分野

知的障害者分野は、高齢者分野や児童分野とは異なる建設時の反対運動や運営時の困難があると感じる<sup>4</sup>。知的障害者分野こそその建設時のお話や取り組みについて聞けるのではないかと考えた。

・児童分野

最近の社会問題として、待機児童問題があげられる。保育園が足りず、子どもを預けることができないという現状がある。では、保育園を増設すればいいのではないかと問うが、保育園建設は簡単ではなく、問題が解決しないということが考えられる。保育園建設に関わる問題としては、高齢化があげられる。退職し、自宅で過ごす高齢者が増えてきており、保育園が建設されることで子どもたちの大きな声がうるさく穏やかに過ごすことができなくなるという理由から反対する人が増えているようである。保育園建設から見える現代の社会問題があり、それゆえの建設する苦労や地域への歩み寄り方を聞けるのではないかと考えた。

以上の理由から、3 分野を調査対象とした。また、これら 3 分野にヒアリング調査を行うことで、それぞれの分野の施設の抱える課題や困難、社会背景、取り組みの違いなど比較ができるのではないかと考えた。

そして、3 分野 5 軒の施設は、地域との関係性にばらつきがあった。具体的には、建設当初から比較的地域との関係が良好であり反対運動が起きなかった施設、建設時地域住民からの反対運動が起きたが現在は比較的良好な施設、現在でも地域住民との間に課題を抱えており良好とまではいかない施設である。地域住民との関係が比較的良好な施設は、なぜうまくいっているのかを知り、困難を抱えている施設とどのような違いがあるのかを知るために、5 軒の施設にヒアリングを行った。以下、ヒアリングを行った各施設の簡単な概要である。

---

<sup>4</sup> 『どんぐりの家』や山田先生のお話を聞いて感じた障害者差別意識があると考えた。

表1 ヒアリング対象の5つの施設一覧

	種類	収容人数	場所	地域との関係	ヒアリング実施日
A 高齢者施設	デイサービス、ケアプランセンター、グループホーム、小規模多機能ホーム	48名	京都市上京区市街地	比較的良好	2016年 11月2日
B 高齢者施設	小規模特別養護老人ホーム、デイサービスセンター	32名	京都市北区市街地	建設時反対運動が生じたが現在は比較的良 好	2016年 10月24 日
C 知的障害者施設	生活介護、就労支援B型、短期入所	40名	京都市伏見区	あまり地域との関わりを持たない	2016年 10月27 日
D 保育園	保育園	165名	奈良市市街地	多くの地域住民とは比較的良 好だが一部良 好ではない	2016年 11月7日
E 保育園	保育園	90名	京都市西京極市街地	比較的良 好	2016年 11月10 日

ヒアリング調査では、主に、施設建設時のこと、建設後（運営時）のことについてお話を伺った<sup>5</sup>。

### 第3章 調査結果

#### 第1節 建設時における福祉施設と地域住民の歩み寄り

社会福祉施設が地域から隔離され、収容施設としての役割を担っていた時代から、社会福祉施設を地域へと開放し、地域住民との交流を図っていく時代へと変化してきた。この時代の流れとともに、社会福祉施設が地域から隔離された場所ではなく、地域の中（市街地等）に建設されるようになってきた。これは、「福祉施設は地域の中にあっただほうがいいのではないか。」と考える私にとっては嬉しい流れである。しかし、地域の中に社会福祉施設を建設することは簡単なことではない。様々な理由から地域住民からの反対の声が上が

<sup>5</sup> 施設長さんが何代も変わっており、現在の施設長さんから建設時のことについて詳しく聞くことができなかった。

ることもあるからだ。では、どのようにして今回ヒアリングに行かせていただいた施設が地域の中に施設を建設することができたのか。建設時における福祉施設と地域のやり取りについて、ヒアリング調査で得られた結果を記していく<sup>6</sup>。

#### (1) A 高齢者施設にみる福祉施設への地域住民の受容過程

A 高齢者施設は、地域の中（市街地）にある施設である。

A 高齢者施設が建設された場所は、もともとその地域で多くの土地を所有している F 社の土地の 1 つであり、駐車場であった。この F 社は、金貸し業を行っており、お金を返すことができなくなった人々から土地を取っていく、いわゆるローカルなサラ金業者であったために、地域住民からのイメージはあまり良くなかったようだ。その土地は、それまで、コンビニエンスストアや駐車場として貸し出していた。A 高齢者施設が建設された地域は、周辺地区の中でも高齢者が多く、高齢社会が進んでいるという特性があり、建設担当者がここに福祉施設を建てる必要性を提起し、「駐車場は流動的で安定しない。福祉施設は、安定した収入を得ることができる。社会貢献のために土地を貸してくれないだろうか。そうすれば、地域住民の企業イメージも変化するはずだ。」と、以前から建設関係のことで F 社の社長と知り合いであった建設担当者が F 社の社長を説得したようだ。建設担当者からの説得、説明を受け、F 社の社長は、A 高齢者施設へ土地を貸すこととなった。

高齢者が多いという地域の特性もあり、A 高齢者施設建設に対する反対運動は大きくはなかった。近い将来、自分もお世話になるかもしれないと考える高齢者や、予備軍の地域住民から共感、賛同が得られたのだ。しかし、そういった地域住民ばかりではなかった。身近に認知症の方がいない人たち、高齢ということをまだ先の話しと考える 30～40 代の若い地域住民からの反対が起きた。特に、A 高齢者施設に隣接しているマンション住民からの反対があった。この反対の声に対して、施設側は、住民説明会を 3～4 回行った。住民説明会では、認知症の方の失禁、徘徊、幻聴という症状に対する不安の声が寄せられた。その中でも、認知症の方が地域を徘徊することで、なにをされるかわからないという不安の声が強かった。施設側は、住民に「施設の鍵はかけずに、地域に出ていってもらうようにする。その代わりに、職員が後ろをついていくようにする。」<sup>7</sup>と説明し、対応を行った。その時に、施設側は、地域住民に対して、利用者の顔写真を地域住民に見せ、「もし、地域の中で見かけたら、声をかけてあげてください。そして、施設に電話をしてください。職員がすぐに迎えに行きます。」と協力をお願いした。また、施設建設を反対している地域住

---

<sup>6</sup> 施設長さんから詳しいところまで聞くことができなかったため、蔵田先生にも建設時のことについて教えていただいた。

<sup>7</sup> 多くの施設は、利用者が徘徊しないように夕方以降、玄関の鍵を閉め、外出できないようにしている。しかし、このような対応は、利用者にとって精神的ストレスとなり、認知症の悪化につながる。よって、声を荒げたり、扉をたたいたり、地域住民にとってもストレスとなるような問題が起きてしまう。それを避けるために、A 高齢者施設ではこのような対応をとっている。

民に対して、施設側は「あなたなら高齢者になった時、どこで暮らしたいですか？自分自身のこととして考えてみてください。」と説得を行った。さらに、認知症に対する正しい理解をしてもらうために説明を 3, 4 回開催された住民説明会の際に一緒に行った。その時には、施設建設に共感、賛同している地域住民が、反対している地域住民に説得を行う場面もあった。結果、反対していた地域住民は「しゃーないか。」と反対することを止めた。施設側からのお願いばかりではなく、地域住民が大切にしてきた御神木を残し、御神木を生かした施設建設をするという施設側の歩み寄りもあった。

このようにして、地域住民の不安を解消するために、施設職員や施設建設担当者が逃げずに説明を繰り返し、対応を行ってきた。その中で、地域住民の方にも施設運営の協力をお願いし、地域住民への理解の姿勢を施設側も持つことで建設に至った。

このように、A 高齢者施設は、建設時が市街地であり、反対する地域住民がいたけれど、自分事としてとらえてもらうことや施設職員、建設担当者、さらに地域住民の説得によって建設に至っている。

次に、C 知的障害者施設の建設時における福祉施設と地域住民とのやり取りについてみていく。C 知的障害者施設は、A 高齢者施設とは異なり、地域の中というよりも、地域から離れた辺鄙な場所とまではいかないが比較的田舎にある施設である。地域の中(市街地)ではなくても、建設時に反対運動は生じるのか、またどのようなプロセスを経て、施設が建設されたのか記していく。

## (2) C 知的障害者施設にみる福祉施設への地域住民の受容過程

C 障害者施設は、住宅地には近いが、周辺は田んぼという場所に建設された<sup>8</sup>。そのため、あまり反対の声はなかったようだ。それでも、やはり、近くに障害者施設が建設されることに対する不安の声はあった。特に、施設の東側にあるだいたい 10~15 世帯の二階建て分譲住宅に住む地域住民から、不安の声があがった。「知的障害者がたくさん施設に集まることで地域への影響はないのか？奇声や唸り声をあげることはないのか？家の中に障害者が入ってくるのではないのか？」という不安の声だった。施設側は、住民説明会を行い、知的障害の説明など、地域住民に対して、しっかりと対応を行った。例えば、分譲住宅に住む地域住民からの「施設の利用者と目があったら怖い。視線が合わないように、利用者の視線の位置に窓はつけないでほしい。」という要望があった。それに対して、施設側は、分譲住宅に面しているところには、木を植えて、中を見えなくし、利用者の視線の位置は壁にし、窓は足元にとりつけるという対応を行った。

このように、施設側の地域住民に対する説明、地域住民からの要望に対する具体的対応

---

<sup>8</sup>田舎は、都会に比べて土地が安い。東京の土地の値段と地方の土地の値段に大きく差があることから分かる。田舎だと、近くに便利な施設があまりない。土地が安いからこそ、都会と同じ値段でその分たくさんの土地を購入することができる。

により建設に至った。

### (3) 2つの施設の建設過程から見えてきた建設に関わる施設間の相違点や共通点

住民説明会での地域住民への説明や説得方法について高齢者施設と分野、知的障害者施設との違いを感じた。高齢者施設では、「あなたなら高齢者になった時、どこで暮らしたいですか？自分自身のこととして考えてみてください。」と地域住民に投げかけている。ゆくゆくは、誰もが年をとり、高齢者になっていく。今は、若くてそんなことを考えられなくても、自分の両親が年をとり、絶対に自分も高齢者になっていくのだ。だから、このような説得をすると、高齢者施設は地域住民がいつかは自分もお世話になる場所というように、比較的自分ごととして施設の建設をとらえやすいのではないかと考えた。しかし、知的障害者施設では、その方法がなかなか通用しないのではないかと考えた。知的障害は、高齢化のように絶対に誰もがもつものではない。知的障害者に自分になるわけがないと思っているのが普通で、自分が知的障害者施設にお世話になるかもしれないとはなかなかイメージしにくい。高齢者施設のように自分ごととしてとらえることが難しいのが、知的障害者施設建設やその運営に関わる難しさだと感じた。

また、知的障害者施設建設の際に、「施設利用者と目があったら怖いから、目線が合わないように窓をつけないでほしい。」という声が地域住民から上がったことに対して、障害者差別が背景にあるのではないかと感じた。こういった意見に対して、福祉施設側が抗弁したりすることができず、うまく地域住民と折り合いをつけていくために受け入れるしかないという状況があることに私は憤りのようなものを感じた。

各施設に建設時のお話を聞いていくと、建設時における地域住民の反対が起きる原因に共通するものがあつた。それは「不安」というものである。この不安というものは、わからないものに対する不安である。福祉施設が施設内で何を行っているのかわからない不安、どんな人が利用するのかという不安である。これは、自分の家の隣に誰かが引っ越してくるとなった時に、どんな人が引っ越してくるのだろうと不安になる気持ちと同じではないかと感じた<sup>9</sup>。突然、「あなたの家の近くに、隣に、地域に福祉施設を建設します。」と言われると不安な気持ちが生じることはおかしくないことである。

さらに、施設を利用する認知症の方や知的障害者に対する誤った認識や偏見から生じる不安も福祉施設建設の際の原因になっていると考えた。その認識の誤りによって、認知症、知的障害を持つ方が、徘徊したり、大きな声を出したり、何か自分たちに危害を及ぼすのではないかと地域住民の不安が生じるのではないかと考えた。まだまだ、認知症、知的障害ということについて正しい理解ができていない現実がある。

---

<sup>9</sup> 障害者施設の施設長さんが、福祉施設が建設されるときに地域住民の気持ちの例えとして、お話ししてくださいこの気持ちに至った。

だからこそ、福祉施設は、地域住民に対して、しっかりと説明を行うのだ。その説明の中で、認知症や知的障害についての正しい知識を伝え、不安を取り除いたり、施設がどのような方針でどのような活動を行うのか伝えたりすることで、分からないものに対する不安を取り除いていっているのだ。社会福祉法人からの説明で福祉施設の全てを理解することは難しいかもしれないが、建設の段階で少しでも地域住民に高齢者や知的障害者の状況を知ってもらうことが後の円滑な運営にも繋がっていくのかもしれない。

また、建設時に地域住民の不安の声や要望に1つ1つ応えていく、福祉施設が地域の中で果たす役割等を伝えていくという福祉施設側の努力が地域住民との信頼関係づくりやその後の運営に大きな影響を及ぼす。建設時のその地域住民とのやり取りは、運営時に生じる地域住民からの不安や苦情の元となることを話し合っているともいえるのだ。

## 第2節 建設後運営時における福祉施設の地域への取り組み

第1節で記したように、福祉施設を建設する際には、地域住民からの反対の声や不安の声があがる。その1つ1つに対応し、地域住民の不安を解消し、理解を促し、説得し、建設に至っている。しかし、建設に成功したからといって、それで終わりではない。施設を運営していく中でも、地域住民との関係は続いていく。運営をしていく中で新たに、地域住民から苦情が寄せられることもあり、トラブルが一切ないということはありません。施設を運営する法人、施設の利用者、そして地域住民それぞれが、お互いに関心を持ちよく毎日を過ごすことができるのか。そのためにどういった取り組みを福祉施設が行っているのか。その取り組みによって地域住民と本当にうまくやれているのかについてヒアリング結果から検証する。

### (1) A高齢者施設の苦情への対応と地域への取り組み

A高齢者施設に隣接するマンションの住民から、施設内にある御神木<sup>10</sup>の落ち葉がマンションの周りに落ちてくるといふ苦情があった。これに対し、施設側は、御神木の枝払いを行い、落ち葉の掃き掃除を行った。また、同じくマンションの1階に住む住民から、施設の窓から漏れるライトの光がまぶしくて、眠れないという苦情をうけた。これに対しては、すぐに謝罪を行い、ライトの向きを変えろという対応を行った。

また、高齢者施設（A高齢者施設、B高齢者施設）では、福祉施設でも地域住民の一員だということで、町内会役員を引き受けたり、町民運動会<sup>11</sup>や地藏盆といった町内会行事への参加や準備活動を積極的に行ったりしている。町内会役員など地域住民があまりやり

---

<sup>10</sup> A高齢者施設建設時に、地域住民が大切にしていた御神木で地域住民への理解として、その御神木を残し、御神木を生かした施設づくりが行われた。

<sup>11</sup> 利用者が現在よりも調子が良かったころは、利用者も運動会に参加したが、現在は、顔を出すくらいとなっている。

たかと思っていることを福祉施設が率先して行うことは、地域住民から喜ばれるそうだ。施設運営で忙しい中でも、こういったことを積極的に行うことは、地域住民からの施設に対するイメージアップにつながっているのかもしれない。また、高齢者施設では、地域の子どもの居場所としても機能している。子どもの親が帰ってくるまでの間、施設で過ごすことを受け入れている。

## (2) C 知的障害者施設の苦情への対応と地域への取り組み

自閉症<sup>12</sup>をもつ利用者が障害特性のために、ベランダでおおきな声で発語し、自分の気持ちを落ち着かせていたことがあった。これは、普段からよくされていて今まで苦情が寄せられたことはなかった。しかし、ある時、施設の近隣住民から「家で体調を崩し、寝込んでいる家族がいる。利用者の声が響いて、しっかりと休むことができない。なんとかしてほしい。」という声があった。施設側は、その苦情に対して、「利用者の障害特性なんだから仕方ないじゃないか。」という思いを抱きつつも、地域の方に迷惑をかけてしまっていることに違いはないからとすぐに謝罪を行った。自閉症を持つ利用者の障害特性についての理解を求める説明はしなかったという。そして、利用者がベランダで自分を落ち着かせるという行動をしないように、施設内の別の場所を模索し、落ち着ける場所を新たに作るという対応を行った。この対応についての私が感じたことを以下、述べる。

施設側は、なぜ謝罪のみを行ったのか？私にはその疑問がぬぐい去れなかった。推測の域を出ないが、施設側が説明をしたところでそんな簡単に地域住民に障害特性について理解してもらうことは難しいと判断したのかもしれない。また、地域との関係性を維持するためにも、すぐに謝罪を行い、その後の対応を行ったのだろう。しかし、利用者にとって、ベランダが一番の落ち着く場所であったはずだ。その場所を奪われることは、利用者にとっては大きなストレスになったと思われる。利用者の意思は無視されてしまう結果となってしまっていないだろうか？知的障害者でなかなかうまく自分の意思を伝えることができないという弱みをうまく利用した対処だったと非難される場合もある。施設長さんや職員さんもこの対応が本当に良かったとは思っていないかもしれない。利用者のことを近くで見守り、よく知っているからこそ、利用者にとってはこの対応が利用者にとってストレスとなる事は分かったと思うからだ。また、利用者が落ち着くための新しい場所を探すということも、職員さんにとっても時間を有し、大変なことであっただろう。そこまで

---

<sup>12</sup> 自閉性障害 (DSM-IV)。自閉症は、①人と目を合わせない、交流を求めない、共感ができないなどの相互社会的交流の障害、②言葉の著しい遅れ、オウム返しによる発語、眼差しやレクチャーなどの非言語的表現の乏しさ、比喩の理解の乏しさなどのコミュニケーション全般の障害、③模倣や見立ての障害、自己刺激行動、儀式的行動の反復、特定の物や記号、さらに順序や配列への固執など、想像力の障害とそれに基づく行動の障害、の3症状を特徴とする発達障害である。3歳までの発達期に始まるが、20%~30%は始語開始の後に、有意味語の消失がみられる、いわゆる折れ線型の発症を示す。

して、この対応をとったということは、地域との関係を築くための施設側の苦渋の決断だったのだろうと私は思い至った。

地域への取り組みとしては、C 障害者施設では、利用者が作った作品の作品展やパンの販売会、手作り市を行っている。これらの行事を行う際には、地域住民に声をかけたり、お便りを出したりすることで、行事への参加を呼び掛けている。行事に参加してもらうことによって、施設について知ってもらうきっかけや、知的障害者への理解を深めてもらうきっかけを作っている。

### (3) D 保育園の苦情への対応と地域への取り組み

D 保育園は、四方を住宅に囲まれている住宅地の入り組んだ場所に建っている。その地域に昔からある保育園なので、地域住民は比較的保育園に対して、好意的であるようだ。この地域は、高齢者が増えてきているという特性がある。多くの高齢者（地域住民）は、子どもの声を聞くと、元気になるとおっしゃってくれているという。しかし、そういった地域住民だけでなく、中には、「子どもの声がうるさい。ピアノの音がうるさい。」という苦情を言う地域住民もいる。この苦情を言う地域住民のことについて、今回の調査では詳しくお話をきくことができた。

苦情を言ってくる地域住民というのは、D 保育園の隣に住んでいる方である。この方は、70 代くらいの夫婦で子どもはいない。D 保育園が建設されてから、引っ越してこられた。旦那さんは、退職後、自宅でお茶の先生をしておられる<sup>13</sup>。そのため、庭も風情漂う日本の庭園のような造りになっている。旦那さんの退職前は、奥さんの方が自宅で過ごすことが多く、奥さんが「保育園の子ども声がうるさい。」などという不満を持っており、旦那さんが奥さんに代わって、保育園に苦情の電話を入れていた。旦那さん退職後、彼自身も自宅過ごす時間が増えたので、奥さんと同じように子ども声がうるさい等の不満を抱くようになった。この夫婦からの苦情に対して、保育園側は、謝罪を行ったうえで、1 つ 1 つの対応を行っている。主な苦情の内容とそれらに対する保育園側の対応は、以下の通りである。

#### ・子どもの声、ピアノの音がうるさい

→夫婦の家に隣接する窓は、できるだけ閉めておくようにする<sup>14</sup>

ピアノを弾く時は、できるだけ庭から離れた部屋で弾き、2 室同時に弾かないよう

---

<sup>13</sup> 「せっかく隣の方がお茶の先生をしておられるのだから、保育園でお茶の教室をしてもらうのはどうか？それをすることで、関係性を築くことができるかもしれない。」と、ヒアリングの際に園長さんに提案してみた。しかし、園長さんは渋い顔をして、「してくださったら嬉しいけど…」と難しい反応をされた。そんな簡単なことではないということを実感した。

<sup>14</sup> 少しの間だけ窓を開けていると、夫婦から「うるさい。」という苦情の電話が入り、その後は窓閉めを徹底した。

にする

夜間はピアノを弾かない<sup>15</sup>

夜に行われるクリスマス会<sup>16</sup>は離れた棟で行う

土日はなるべく保育園を開けないようにし、何か行事があるときには事前に声をかける<sup>17</sup>（同窓会は行わない、日曜日の行事は卒園式のみ）

- ・屋上でのプール活動による水しぶきが庭に入ってくる  
→プールの横には網フェンスがあったのだが、それに加えて壁をもう 1 枚増設する  
結局、プールは屋上ですのをやめて、園庭で行うようにした
- ・和太鼓の音がうるさい、振動が伝わる  
→和太鼓にタオルをかけて、音が大きくなるようにする  
和太鼓をするときには、必ず窓を閉める  
結局、和太鼓の取り組みはやめた
- ・保育園の耐震工事の騒音、ほこり  
→耐震工事についての説明を行う<sup>18</sup>  
土日は耐震工事を行わない  
ほこりの対策として、職員も掃き掃除を行う

以上のように、保育園側は、苦情に対して、1 つずつ対応を行ってきた。この対応により、少しずつ隣の夫婦とも関係性が築けてきたという。それを実感されたのは、保育園の耐震工事の時であった。耐震工事の際に、夫婦から「工事のついでに保育所の窓を二重窓にしてほしい。」という要望があり、保育園側はそれに応じ、窓を二重窓にした<sup>19</sup>。この対応によって、夫婦は保育園が自分たちに歩み寄ってくれたと感じたのか、この一件から苦情を言う回数が減ったそうだ。また、耐震工事について、夫婦側から、「この日とこの日は、お茶の教室をしているので工事はしないでほしい。でも、その日だけ避けてもらえれば、工事をしてくださってもよい。」という歩み寄りが見られた。ここで、園長さんは、「やっと関係性が築けてきたのかな。」とおっしゃっていた。

苦情の対応による規制で子どもが目いっぱい活動をするのができなくなるのは、かわいそうだと和太鼓やお泊まり保育などの活動を中止にするという苦渋の決断をしなければいけないこともあったが、1 つ 1 つしっかりと向き合い、対応していく姿勢が地域住民と

---

<sup>15</sup>D 保育園は、夜 10 時までの夜間保育も行っている

<sup>16</sup> 子どもから親御さんへ、歌のプレゼントがあり、歌声が響く。

<sup>17</sup>D 保育園は土曜日保育も行っている。多くの子どもが登園する際にも声をかけるようにしている。また、この声かけは、隣の夫婦だけでなく、その他の地域住民にも行っている。

<sup>18</sup> 地域住民対象で説明会を行った。保育園関係者だけでなく、施工者の方も参加し、説明を行った。

<sup>19</sup> 耐震工事に関わった蔵田さんは、「二重窓にすることが本当にいいことなのか？保育園側ばかりが妥協していて、施設が低姿勢になっていることは残念なことだ。」とおっしゃっていた。

の関係性を築いていく要因となった。

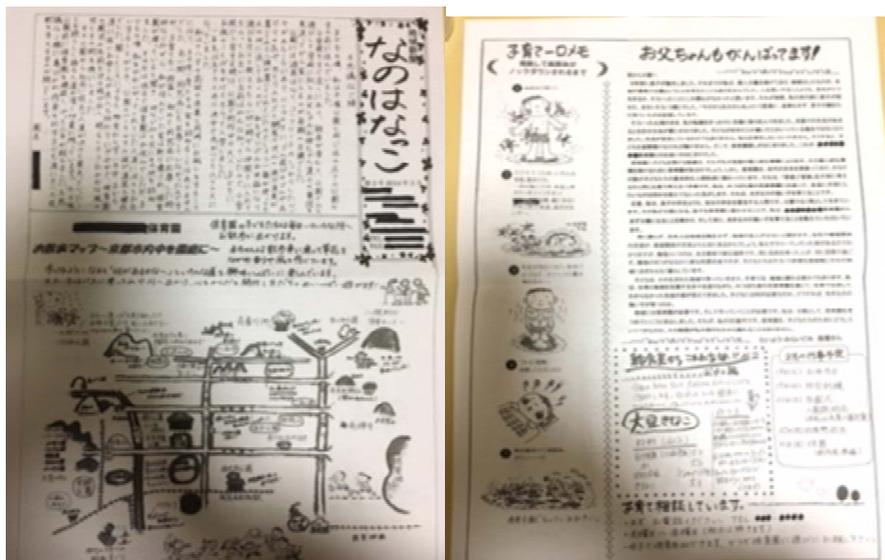
また、地域への取り組みとして、D保育園では、保育園で行われた行事で作った秋刀魚や焼き芋、お餅を周辺に住む15,6軒の住民に配るという取り組みをされている。私たちが実際に近隣住民におすそわけをするのと同じ感覚で行っている。また、子育てサロンを開き、地域で子育てをするお母さんと子どもと一緒に保育園へ来て、取り組みをしたり、子育て相談会を行ったりしている。園長さんは、何かあれば地域の自治会に顔を出し、懇親会の参加をしていたり、子どもたちの散歩の際にゴミ拾いを行ったりもしている。

#### (4) E保育園の地域への取り組み

D保育園では、地域住民の一員としての地域への取り組みが多くみられた。ヒアリングを行ったもう一方のE保育園では、D保育園とは異なる取り組みを行っていたので以下、記していく。

E保育園では、地域住民に「地域新聞」を配っている。この「地域新聞」には、どんな保育園なのか、保育園がどのような取り組みをしているのかといった内容を掲載し、保育園について地域住民に知ってもらおうという取り組みを行っている。「地域新聞」を通して、地域住民が保育園の取り組み等に対して抱く疑問を解消することができ、保育園で行われている活動に理解をしてもらおうきっかけとなっている。さらに、この「地域新聞」には、育児についての豆知識を掲載している。この保育園に通っていない子どもの地域のお母さんの助けになるような取り組みとなっている。

写真1 地域新聞「なのはなっこ」の両面



#### (5) 各施設から見てきた運営時の福祉施設の地域に対する姿勢

地域住民の苦情や要望を素直に受け止め、迅速に対応していくという福祉施設の姿勢が見られた。福祉施設の外にいる地域住民からの苦情や要望は、福祉施設の中にいる職員や利用者は当たり前となっていることを見直す機会になっているのではないかと感じた。第三者の目線という客観的な意見が施設内に持ち込まれ、それを素直に受け止め、対応することで、施設が利用者にとっても職員にとっても地域住民にとっても良い方向へと変わっていくきっかけとなっていることがあるのだと考えた。しかし、その一方で、福祉施設側は、地域住民からの意見を素直に受け止め、なんでも地域住民の要望に応じていくというのは、本当にいいことなのだろうかという疑問を持った。

D 保育園のように子どもたちの活動を取りやめたように、福祉施設が本当はこうしたいのに、地域住民とうまくやっていくために妥協するということは、福祉施設がまだまだ地域の中で立場が弱いような気がして悲しい気持ちになった。また、福祉施設が地域住民からの苦情に対して、「すぐに謝罪、すぐに対応」しているが、それで本当にいいのかという疑問も抱いた。すぐに謝罪することで、福祉施設側が 100%悪いと思われることでなくても、施設側が「こちらが悪いんだ」と認めていることになってしまっているような気がする。それは、結局、利用者を尊重するどころか、利用者が悪者になりかねないことではないか。利用者のことを理解してもらう前に、施設側が半分、地域住民に理解してもらうことを諦めているような印象を受けてしまった。それでは、障害者や認知症高齢者の理解はすすまないのではないかと感じる。

日々の業務で職員も忙しいだろうし、1つ1つの苦情に対して、障害者や認知症高齢者の理解を求める対応はできないだろうけれども、施設としてこれだけは譲れないという部分を持つことも必要なのではないかと思う。例え、それがあつことで地域との関係性が崩れたとしても、長い目で見れば、施設と地域がもっとお互いに気持ち良く過ごしていくために必要なことだと私はどうしても思ってしまう。

それでも、福祉施設と地域が共存していくためには、仕方がないと諦めることも必要なことなのかもしれないと思う部分もある。私たちの人間関係でも、ある1人が主張しすぎて勝手な行動をとっていると周りの人が離れていってしまうことがある。福祉施設が地域の声を無視して、歩み寄ろうという姿勢がないと、地域との距離がどんどん開いていってしまいかねない。福祉施設と地域も、人と人の付き合い、人間関係と同じなのかもしれないと考えた。福祉施設が地域に対して歩み寄っていく姿勢を見せることで、地域住民の福祉施設への感情が変わるのかもしれない。

さて、地域との関係を構築する取り組みとして、5つの施設に共通しているのは、施設を地域住民に貸し出しているということである。福祉施設の1つの部屋を地域の会議やバザー等のイベントの利用に貸し出しているのである。福祉施設は、利用者だけのものではなく、地域住民の地域の財産であり、地域のものとして活用していく開かれた福祉施設と

なっていた。

福祉施設が地域住民からの苦情や要望に応えるだけでなく、運営していく中で、積極的に地域に関わっていこうとする姿勢がみられた。町内会行事に参加したり、行事で作ったものをおすそわけしたりするなど、福祉施設が福祉施設だからと特別だとは考えずに、地域住民の一員として存在しようとしている姿勢を感じた。また、福祉施設が利用している人だけのものではなく、地域住民のものでもあるということを感じた。地域に開けた施設にしようとする姿勢があった。

そして、積極的に施設を地域住民に開き、情報発信をしていくことで、地域住民に施設について知ってもらい、障害理解や認知症理解にもつなげているのではないかと感じた。これは、福祉施設が地域と共存していくうえで、重要なポイントではないかと思う。お互いを理解し合うことは簡単ではないが、少しずつ理解していこうとする姿勢をどちらかが持ち続けていくことが必要なことで、その役割をまず福祉施設側から行っているのだ。

知的障害者施設の施設長さんが、「イベントの宣伝としてチラシを 1000 枚配ったとしても、実際に訪れる人は、利用者家族や施設関係者ばかりで訪れる人は限られている。それが例え一方通行であっても、積み重ねていくことが必要なのだ。」とおっしゃっていた。また、「100%の理解は難しい、50%でも理解してもらえると嬉しい。」ともおっしゃっていた。地域住民みんなに理解してほしいというのは、家族や福祉施設の思いあがりであって、福祉施設に関わる人の勝手な考え方である。理解してもらうためには、共存していくためには、じっくりと時間をかけて、努力していくことが必要なのだ。

### 第 3 章 福祉施設は地域の中（まちなか）にあるべきなのか？

ヒアリング調査を行うことで、各施設の施設長さんが、「福祉施設は地域の中（まちなか）にあるべきか？」ということについてどう考えておられるのかを知ることができた。

A 高齢者施設と B 高齢者施設の施設長さんは、「福祉施設は地域の中（まちなか）にあったほうがいい。」とおっしゃっていた。施設が地域の中にあることで、利用者の面会にきてくれる家族さんやお友達、民生委員の方が増えるからである。もし、施設が人里離れた山奥にあったとすれば、距離的な問題、交通の問題によってなかなか頻繁に面会には来ることができない人が増えるそうだ。また、利用者家族が自宅と施設という程よい距離感で余裕をもって、介護の手伝いができたり、利用者と接することができたりするという。そして、なにより、利用者自身がこれまでの間住み続けてきた自分の地域で、思い出のある地域で過ごすということが、施設に入所しても安心して過ごすことができる要因となっているようであった。そのため、高齢者施設では、住み慣れた地域の中に福祉施設はあるべきだという意見であった。

E 保育園の施設長さんは、「施設がどんな地域にあっても施設の姿勢は変わらないし、環

境のせいでこれができないあれができないと言いたくない。どこにあったっていい。」とおっしゃっていた。それでも、現実的に考えると、山奥にあると子供たちの送迎がしにくくなるし、職員が集まらないということもおっしゃっていた。本当は、E 保育園としては、山の中に保育園を作って、子供たちを自然の中でのびのびと遊ばしてあげたいという気持ちがあるようであった。

C 知的障害者施設の施設長さんは、「福祉施設が必ずしも、地域の中（まちなか）にあることが良いとは限らないのではないか。今でも、その答えは分からないし、半信半疑。」とおっしゃっていた。また、施設長さんは、「地域の中にあること、山奥にあること、どちらにもメリット、デメリットがあり、どちらにあることが幸せなのかは人によるのではないか。例えば、家を買う時や建てる時、田舎の方の土地が安いところに大きい家を建てるのか、また小さくてもいいので便利な都会の方にするのか、その価値観や幸せは人それぞれなのと一緒にじゃないか。」とおっしゃった。山の中にあることで、緑に囲まれた自然の中でのびのびと過ごすことができたり、山登りやハイキングなど地域の中にある施設ではできないことができたりもする。

その逆で地域の中にあることで、近くのスーパーに気軽に買い物へでかけたり、山の中にあると簡単にできないことができたりもする。だからこそ、福祉施設が地域の中にあることだけが本当に良いことなのか分からないとおっしゃっていた。そして、それは、施設経営者目線なのか、利用者目線なのか、家族目線なのか、地域住民目線なのかという誰目線から考えるのかによって異なるのではないかとおっしゃっていた。

施設長さんは、ご家族（長男）に知的障害の子どもがおられる。施設長さん自身、家族目線から考えると、山奥の施設の方が、周りからの差別の目がない環境の中で、息子さんがのびのびと過ごせるという意味で山奥にあってもいいと考えておられるようであった。施設長さんは、施設経営者目線と家族目線の両方を持っておられるからこそ、福祉施設は地域の中にあるべきなのかということについて、半信半疑なのかもしれないと感じた。

高齢者施設、知的障害者施設、保育園という3分野での「福祉施設は地域の中に（まちなか）あるべきか？」に対する意見を聞くことによって、「福祉施設は地域の中（まちなか）にあったほうがいい。」という今までの私の考え方を見つめなおすことができた。特に、C 知的障害者施設の施設長さんのお話を聞いて、私は、家族目線から福祉施設が地域の中にあるべきだと考えていることに気づいた。その気づきを知的障害者施設にヒアリングに行った日の振り返りに記していたので、以下、記しておく。

施設長さんから、障がい者をもつ家族についてのお話をしていただき、とても印象に残っている。施設長さんから「齋藤さんは、弟さんがいて、福祉施設が地域の中にあるのと、ないのとどちらがいい？」と尋ねられた。その時、私は、「個人

的な考えだけど、地域の中にあってほしい。親がいなくなって、面倒をみるのは私。そうなると、弟自身がどこかで地域の方と繋がっていなくては、私だけで面倒を見ないと…という重圧がかかってしんどい。弟が通っている施設がまちなかにあり、地域の方と施設を通してでも繋がりとすると、地域の方にも認めてもらえているような気がして、気持ちが楽になると思う。」と正直な気持ちで話していた。話しながら、私が、福祉施設が辺鄙な場所ではなくて、地域の中にあってほしいと思う根っこの部分はここなのかなと感じた。弟の地域とのコミュニティづくり、弟が地域で受け入れてもらえるようにという思いがあって、この研究に取り組んでいる部分もあった。兄弟に障がい者がいるという、兄弟ならではの思いがあるのだと気づいた。

上記にも記しているように、私は、福祉施設がどこにあるべきなのか、家族に障害者がいるという家族目線での考え方が強かった。しかし、私と同じように家族に障害者がいる障害者施設の施設長さんの家族目線での考え方とは異なるものであった。知的障害者を家族に持つ者同士でも、「福祉施設が地域の中にあるべきか」に対する考え方は異なり、高齢者施設と保育園のように同じ施設経営者でも考え方は異なっている。

「福祉施設が地域の中にあるべきか。」というのは、利用者、利用者家族、施設経営者、地域住民（福祉施設に対して身近に感じている人、関係ないと思っている人、どちらでもない人）、人それぞれの価値観によって考え方が異なるのではないか。福祉施設が建設されたその地域で、価値観の違う、考え方の違う人々がいかにその価値観を認め合いつつ、同じ地域で暮らしていくことができるのかを考えていく方が重要なのではないかと感じた。

福祉施設が地域の中にあるのか、山の中にあるのか、どちらがいいのかについては、答えがでる問題ではないし、勝手に答えを出してしまっはいけないことなのかもしれない。

#### 第4章 まとめ

私は、この卒業論文の中で、以下のことを検証することを当初の目的としていた。

実際に、社会福祉施設は、地域に開かれ、地域と関わる施設になっているのだろうか。施設完結の生活を送っていた利用者（入所者）は、地域社会にまで生活圏を広げることができているのだろうか。地域住民は、これまで排除されてきた福祉施設や社会的弱者を受け入れることができているのだろうか。福祉施設が利用者だけのものではなく、地域住民のための福祉施設になっているのだろうか。これらの実態を確かめるべく、社会福祉施設運営者にヒアリングをすることにした。ヒアリングを通して、社会福祉施設が社会化されているのか、地域社会でどのよ

うな在り方をしているのか、地域住民との関係はどうなのか、検証を進める。その中で、社会福祉施設が地域に開けた施設にするために、どのような取り組みを行っているのかについても検証を進める。

調査の結果から、社会福祉施設が地域社会に開かれているかというのは、分野によって少しばらつきがあるように感じた。高齢者施設は、「住み慣れた地域で暮らす」という施設の指針もあり、施設としても地域に積極的に開いていっていた。地域の町内会に属し、町民運動会などの地域行事に利用者も一緒になって参加している。地域に溶け込み、地域住民の一員として、施設、利用者、職員が受け入れられている印象を受けた。高齢者施設が、地域の子どもたちの放課後の居場所になっているなど、施設が利用者のものでなく、地域のものとして機能していた。

保育園は、一部地域住民と現在もトラブルを抱えていることもあるが、それでも比較的地域住民と良好な関係性を築けているという印象を持った。地域新聞を配ったり、町内会に顔を出したり、1人の地域住民と同じようにおすそわけをするなど積極的に地域に関わっている。施設を地域の行事に貸し出す機会、地域のお母さんが気軽に保育相談を行う機会を設けている等、保育園の機能と地域への開放というように地域のものとしての役割を持っている。

それに対して、知的障害者施設は、もう一つ地域との関わりがうまくいっていないようなイメージを抱いた。ヒアリングに行かせていただいた障害者施設が比較的、田舎にあるということもその要因なのかもしれない。施設側としても、なにも地域に対して行っていないというわけではなく、地域住民にも参加してもらえそうな作品展や手作り市を行って地域に施設を開くイベントを行っている。しかし、参加するのは、施設関係者がほとんどであり、地域住民の参加はあまりないという。まだまだ施設が地域に浸透していない。利用者も施設内にとどまり、地域に生活圏を開いていっていないとはいえない。

なぜ、高齢者施設、保育園と障害者施設の間にこのような差があるのだろうか。高齢者施設や保育園は、自分ごととしてとらえやすく、いつかは自分たちもお世話になる場所だという意識があるが、障害者施設は自分が障害者になるわけがないと自分ごととしてとらえることができないことが原因の1つなのかもしれない。また、施設に地域住民が入りやすい高齢者施設や保育園は、障害者施設に比べて、利用者に対する不安や恐怖心がないからなのではないか。知的障害者施設は、高齢者施設や保育園に比べて、積極的な地域への関わりが見られない。それによって、知的障害者理解が進んでいないことで、利用者に対する怖いや危険といった偏ったイメージを地域住民が持ってしまっているのかもしれない。

そういった施設への理解、利用者への理解を進めるためにも、地域住民とうまくやっていくためにも、各施設の地域に対する姿勢や取り組みが関わってくるのではないかと考え

た。施設側ばかりが、地域とうまくやっていくために低姿勢でいることというのも良くないし、だからといって、施設を理解するという気持ちを前面に出していくのも傲慢である。施設として、ここだけは地域住民の言いなりにはなれないという部分を持ちながら、地域住民とうまくやっていくために信頼を得ることができるように対応していく必要がある。それを続けていくことで、どんな場所に施設があったとしても、少しずつ地域との関係性が生まれてくるのではないかと考えた。

また、施設側も、地域住民の中には、施設や社会的弱者を簡単に受け入れることができない人、説明を繰り返し、関わりを持っていくことで受け入れることができるようになる人、最初からなんとも思っていない人がいるということを理解するということが必要なことだと考えた。それを理解していれば、「なんで理解してくれないんだ。」という施設側の気持ちも軽減されるだろうし、根気よく地域との関わりを続けていけるのではないかと考えた。

そして、地域住民の中だけでもこれだけたくさんの価値観を持っている人がいるのだから、施設側もそれぞれの価値観を持っているのだと感じる。知的障害者施設の施設長さんが言っておられたように、福祉施設を建設するとき、地域との関わりを持ち、積極的に地域へ出ていくために地域の中に建てたいと考える人、田舎でのんびりと広々とすごすために田舎に建てたいと考える人、施設によってさまざまである。福祉施設は、地域の中にあるほうが良いという決め付けはできず、福祉施設にもそれぞれの価値観があるということを理解しなければいけない。どんな場所にあっても、地域の一部にあるということに変わりはないし、地域との関わりは生じてくる。そんな時に、施設側がどんな姿勢で地域に関わっていくのか、施設と地域がお互いに歩み寄りながら理解していくということが地域と福祉施設が居心地良く過ごしていくために必要なことなのかもしれない<sup>20</sup>。

---

<sup>20</sup> 2016年7月26日、「社会福祉法人かながわ共同会 津久井やまゆり園」で無差別大量殺人事件が起きた。私にとってこの事件はとても衝撃的でショックな出来事であった。私は、今回事件にあわれた施設と同じような障害者入所施設で社会福祉士現場実習を行った経験がある。その時に関わった利用者さんと障害の程度もとても似ていて、余計に辛い気持ちになった。寝たきりの状態で自分の力で逃げることもできない入所者を次々に…と思うと、悲しくてたまらなくなった。

さらに、犯人が津久井やまゆり園で働いていた職員であったこと、福祉に関わっていた犯人が「障害者なんていなくなればいい。」等と発言していたことに本当にショックを受けた。重度の障害で、サポートがなければ生きていくことができない方かもしれないが、それでも毎日笑顔を見せてくれて元気や勇気を与えてくれることを私は社会福祉士現場実習知っているのだから、そんな考えをしてしまう犯人のことが許せない。犯人の「障害者なんていなくなればいい。」という発言は、私の弟もその一人に含まれているんだろうと感じてしまった。障害者のことを嫌がる人もいるということは理解していたつもりでも、実際に言われると苦しくなった。

そんな気持ちを抱きながら、保坂展人『相模原事件とヘイトクライム』（岩波ブックレット2016）を読んだ。この本の中で、まだまだ障害を差別する気持ちが残っているという現実を感じ、優生思想というものが人間のどこかに潜んでいるという恐怖を感じた。また、この本の中では障害者が1つの施設にたくさん集まり、そこで生活していること、そしてその施設が地域から隔離された場所にあることへの問題も述べられていた。これは、私の問題意識に関わってくるものであった。

そして、卒業論文を進めていく中で、障害者差別があるという現実を受け入れながら、そういった考えを持っている人が地域の中にいるということを受け入れながら、施設は地域と関わり続けることに気づいた。そして、価値観の違う人々も納得したうえで、施設建設を進めていくために施設が根気よく説得、説明をしていく必要があるのではないかと感じた。

## おわりに

ヒアリング調査で直接、施設長さんとお話し、施設長さんの気持ちや葛藤を聞くことができた。きれいごとや事実だけでなく、お話の中で、本音を聞くことができたので、施設長さんも私たちと変わらないひとりの人間だなと感じ、身近な存在に感じた。直接、お会いしていなかったら、施設長という肩書があって、自分たちとはかけ離れたイメージを持ったままだったかもしれない。特に、知的障害者施設の施設長さんも私と同じで家族に障害者がいるということをお話の中で聞き、より身近な存在に感じる事ができた。そして、同じ境遇にあることから、話そうとは考えていなかったことにまで話が広がり、そのお話が私に大きな影響を与えることになった。以下、ヒアリングを行った日の振り返りである。

施設長さんは、「弟さんがいても、あなたの人生はあなたのものなんだから大事にしてください。障がいをもつ兄弟がいて、独身で最後まで面倒をみるという人もいるけれど結婚して家庭を持ったっていい。好きな人（結婚する人）には弟さんのことを理解してほしい、理解してくれる人じゃなければ無理と思ってるでしょ？別にそんなの求めなくてもいい。そのために、第三者の力があって、サービスが弟さんにはあるんだから。」と話してくださった。私は、この言葉を聞いた時に、肩の荷が下りたような気持がした。姉も結婚して、子どもがいて、弟の面倒は見れる状況ではないなと感じていて、私が見ないといけないとどこかで思っていた。家族のことは家族がみるという考え方が自分の中にもあるんだと感じた。就職で近畿を離れることができなかつたのも弟の存在があるからだったのかもしれない。就職を期に、一度少しの間でも弟離れしてみようかなと思った。

このように、施設長さんと予想していなかったお話まですることで、自分自身を見つめなおすきっかけとなった出来事があった。施設長さんと話しているときに、自分の本音が口からすらすらと出てきて自分がこんなことを心の中で考えていたのだということにも気づくことができた。さらに、家族である弟のことを、姉である自分が最後まで面倒を見なくてはならないとどこかで強く感じている自分がいることにも気づくことができた。日本では、昔から家族は家族で面倒を見る、施設へ入れるのは薄情で恥ずかしいことだとされてきた。この考えは、自分の中にはないと思い込んでいたので、こんな感情を抱いている自分がいることに戸惑いを感じた。しかし、障害者施設の施設長さんと話すことで、弟のこを受け入れてくれる人が社会の中にはいるのだということに気付くことができ、肩の荷が下りた。

そして、私が、この卒業論文を書いたのは、やはり弟の存在が大きく関係していたのだ

と思う。障害を持つ弟と 22 年間ずっと一緒に暮らしてきて、時には周囲の偏見の目を気にして傷ついたりしたこともあった。それでも、弟のことを仲間に入れてくれる人たちもいて、可愛がってくれる人たちもいた。私は、どこかで、全ての人に弟のことを受け入れてほしいという気持ちがあったのだと思う。だから、「福祉施設は地域の中にあるほうが良い。そうすれば排除されているような気持にはならない。もっと地域住民と関わりをもてるはずだ。」と考えていたのだ。でも、それは、家族ゆえの身勝手な押しつけであり、障害者である弟（社会的弱者）を理解して当たり前だと思い込んでいたということにこの卒業論文を書いていく中で感じた。

私は、たまたま弟が障害者だから、高齢者や障害者、福祉施設のことを理解しやすい、受け入れやすいだけであった。全ての人々が、私と同じ境遇にいるわけではないし、受け入れることができない人がいても当然であった。そんな人もいて、実際に理不尽とも思われる要求や苦情があったことを自分の耳で聞くことは辛いな、これが現実なんだと苦しい気持ちになる事もあった。それでも、障害者や高齢者、子ども、福祉施設をどうしても受け入れることができない人、受け入れることができる人、どちらでもない人、様々な価値観を持っている人がいることに気づくことができた。

そして、そんな様々な価値観を持つ人々が集まって地域が成り立っている。お互いにその価値観を認め合いつつ、歩み寄りながら、誰にとっても居心地の良い地域をみんなで築き上げていくんだろうなと考えることができた。

また、相模原事件で受けたショックをこの卒業論文を書いていく中で、自分の中で整理することができたように感じる。それは、価値観の違う人がいて当たり前ということを再確認することができたこと、その価値観を認め合いつつ、共に理解し合いながら暮らしていくこと、それを施設が諦めようとはしていないことを感じたからだ。そして、施設と地域の関わりの中で、地域住民も少しずつ意識や気持ちの変化が起きていくことを知る事ができたからだ。「絶対に障害者の差別はなくなるんだ」という悲しい気持ちから、諦めず根気よく分かりあおうとする姿勢があれば、いつになるかは分からないけれど、何か変化は起きていくのではないかという希望が持てたような気がする。

## 参考文献

井上・岡田「知的障害者入所更生施設の歴史的課題の検討—知的障害者の『地域移行』に向けて」生活科学研究誌 6、大阪市立大学、2007、p209-223

井村圭壮『日本の社会事業施設史：「救護法」「社会事業法」期の個別施設史』学文社、2015  
金蘭姫 「地域福祉推進と社会福祉施設」関西学院大学社会学部紀要第 103 号、2007、p59-71

野村恭代『精神障害者施設におけるコンフリクト・マネジメントの手法と実践』明石書店、2013

福岡寿 『施設と地域のあいだで考えた』ぶどう社、1998

保坂展人『相模原事件とヘイトクライム』岩波ブックレット、2016

山本おさむ 『どんぐりの家』小学館、1993